

福嶋式桑刻機

桑刻機はかつて商業的に蚕を飼育する人々にとって重要な道具であった。福嶋式桑刻機は単純な機械なのに、この道具の開発が、日本の養蚕産業、そして日本の経済全体に影響を与えた。

蚕は、ふ化してから繭作りを始めるまでの期間、ひたすら桑の葉を食べ続ける。蚕農家にとって、蚕が食べる十分な量の桑の葉を切ることは、最も骨が折れ、時間がかかる仕事の1つである。1900年、福島元七（1866～1923年）という発明家が考案した福嶋式桑刻機は、給餌工程全体に変化をもたらした。

この裁断機は、桑の葉を切る大きいナイフを壁に取り付け、これにコンベヤベルトを組み合わせた機械である。葉は切られた後、機械の前方へ送り出された。切断刃の位置は簡単に調節できたので、葉を様々な大きさに切ることができた。これにより、蚕がどの発育段階にあっても、食物を準備することができた。簡単なオートメーションとでも言うべきこの発明は、養蚕業に革命を起こした。そして、養蚕業は、日本の20世紀早期における産業開発の重要な柱になった。